



# 新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



## 第 15 回新藤兼人賞

2010年12月3日（金）東京會館 11階 ゴールドルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／角川映画株式会社

コダック株式会社／株式会社IMAGICA／株式会社ファンテック

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

## 金 賞

呉 美保『オカンの嫁入り』 監督・脚本



**受賞者プロフィール** 1977年、三重県出身。大阪芸術大学芸術学部映像学科を卒業後、大林宣彦監督事務所「P S C」に入社。スクリプターとして映画の現場に携わりながら制作した『め』が、02年「Short Short Film Festival」に入選。また次の短編『ハルモニ』が03年「東京国際ファンタスティック映画祭/デジタルショート 600秒」にて最優秀賞を受賞する。同年「P S C」を退社、フリーランスのスクリプターをしながら書いた初の長編脚本『酒井家のしあわせ』が05年サンダンス・NHK国際映像作家賞/日本部門を受賞し、06年監督デビュー。本作は長編2作目となる。

## 銀賞

吉田恵輔『さんかく』 監督・脚本・照明



**受賞者プロフィール** 1975年、埼玉県出身。塚本晋也監督作品をはじめ、多くの映画・CM・PVで照明技師として活躍。一方で学生時代より監督として自主製作作品を撮り続け、2006年に監督した「なま夏」で、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭にてオフシアターコンペティション部門グランプリを受賞。「机のなかみ」(07)で劇場用長編映画監督デビュー。『純喫茶磯辺』(08)、3作品目の本作も自身によるオリジナル脚本。

## SARVH

### プロデューサー賞

桂 壮三郎『アンダンテ～稲の旋律～』企画・製作



**受賞者プロフィール** 1947年、福岡県生まれ。長崎県福江市で育ち、東京にて宣伝会社を経て日活芸能でTV作品の助監督を経験する。72年より日活ロマンポルノの助監督を務める。その後、日活児童映画部へ配属され、企画・製作・配給業務に携わり、親子映画運動、自主上映鑑賞運動との係わりを持つ。

94年に企画・製作会社ゴーゴビジュアル企画を設立し、いじめ問題を描いたアニメーション映画「5等になりたい。」をプロデュースし全国的に大ヒットさせる。

97年には阪神大震災から復興する子ども達を感動的に描いたアニメーション映画「地球が動いた日」を完成させ、神戸映画祭 市民特別賞に輝いた。99年に子どもの虐待を描いたアニメーション映画「ハッピーバースデー 命かがやく瞬間」は中央児童福祉審議会特別文化財を受賞する。以後、地球環境問題を描いた「ダイオキシンの夏」(01)、身体に障害をもちながらも健気に生きる少女を描いた感動作「もも子、かえるの歌がきこえるよ。」(03)、平和を希求し戦後60年記念作品として製作された「ガラスのうさぎ」(05)、家族の絆を美しい自然の中で描いた「大ちゃん、だいすき。」(07)等々、いずれもアニメーション映画として製作され、文部科学省をはじめ多くの団体の賞賛を得た。09年に初めての実写映画「アンダンテ～稲の旋律～」を手がける。日本映画復興会議代表委員を務めている。

若松孝二『キャタピラー』企画・製作・監督



**受賞者プロフィール** 1936年、宮城県生まれ。63年にピンク映画『甘い罠』で映画監督としてデビュー。低予算ながらも圧倒的な迫力ある映像でピンク映画界としては異例の集客力をみせた。65年に若松プロダクションを設立し、『壁の中の秘事』がベルリン国際映画祭に出品され、物議をかもす。71年、パレスチナゲリラの闘争を描いた『赤軍—PFLP 世界戦争宣言』を発表。『胎児が密猟するとき』『天使の恍惚』『水の無いプール』『17才の風景』などの話題作を次々と世に送り出す。連合赤軍をテーマとした作品『実録・連合赤軍あさま山荘への道程』（07）は、07年8月の湯布院映画祭にて「特別試写作品」として上映。同年10月には、第20回東京国際映画祭にて「日本映画・ある視点作品賞」を受賞した。08年2月に開催された第58回ベルリン国際映画祭においても、最優秀アジア映画賞（NETPAC賞）と国際芸術映画評論連盟賞（CICAE賞）を受賞し、国内でも毎日映画コンクールで監督賞、日本映画評論家大賞で作品賞など、国内外問わず多くの映画賞を受賞。『戒厳令の夜』『愛のコリーダ』などプロデュース作品も多数。

---

## 審査員講評

---

### 金賞・銀賞選考委員講評

#### 審査委員長：山上徹二郎（シグロ）

今年の審査対象作品は133本であり、昨年と比べても新人監督作品はむしろ増えている傾向にある。各大学などでの映像学科の増設や、ネット上での動画の広がりなど、映像制作がより身近になり、映画の可能性が広がっていることが背景にあると思う。しかし一方で、今年の新入作品を見ていて感じたのは、製作費の低予算化が進んでいるのではないかという点だ。作品のテーマが小さくより身近な事柄に集中する傾向とともに、テーマと制作予算の間に整合性がなく無理のある企画のために、映像のマチエールが失われていたり、作品そのものが破たんしているように思えるようなものもあった。また、プロデューサーが選ぶ賞という観点から、作品の質とともに一定程度の興行的な成功も視野に入れた選考を心がけた。しかし、この点でも今年の新入作品は概して公開規模が小さく、ヒットにつながらなかった作品が多いように思えた。そのような中で、今回選ばれた金賞作品の呉美保監督『オカンの嫁入り』は4名の審査員の中で大きく評価が割れることなく決まった作品である。銀賞作品は最後に『さんかく』と『SRサイタマノラッパー2』の2作品が残り、最終的に吉田恵輔監督の『さんかく』が選ばれた。最終選考に残った作品が20作品ほどあり、ここに書いたような問題はありつつも、私にとって確実に映画が進化しているという実感を持つことができた審査だった。記録や記憶に残るような優れた作品を制作することも大事だが、作品を作り続けることも同じように大切なことだと思う。今回選ばれた呉美保監督と吉田恵輔監督の次回作に期待したい。

#### 利倉 亮（レジェンドピクチャーズ）

今年も130本以上の新人作品があった。いつもその数の多さに感心します。

映画製作は大なり小なり大金を使う仕事です。それを新人に任ずというのは心身ともに大変労力を使うことです。新しい感性や感覚に出会うことも大切ですが、助監督などで数多くの現場の経験も重要です。新人作品を観て、普通の日常の淡々とした出来事を描こうとしている作品が多く見られる。その割には人間観察が出来ていないというか、人に興味を持たない監督が多いように思う。せっかく大金を使って制作するのだから人に大きな感動を与えられるように目指してはどうかと思う。映画製作にはシナリオ・撮影・照明・美術・編集・音楽・メイクなど多くの知識を必要とします。予算や現場のいろいろな問題はあるが、折り合いのつけ方が簡単で深く考えていないように感じます。銀賞になった「さんかく」は、男女の恋愛模様が繊細に脚本・演出・構成がよく出来ていたと思います。映像も写真的で低予算を感じさせない描写でした。金賞の「オカンの嫁入り」は、登場人物の感情を抑えた演出に好感が持てました。特にラストシーンをオカンの死で終わらなかったことが作品の後味を良くしているように思います。若い監督

が描きたがる日常の出来事にちょっとした笑いや幸せを上手く描いた作品だったように思う。台詞の「つるかめ・つるかめ」が心地よく、劇場を後にしました。

### 三宅澄二（ミコット・エンド・バサラ）

呉監督、吉田監督おめでとうございます。

映画不況といわれていますが、今年の候補作品が133本と昨年を上回ったことに驚きました。その中で「オカンの嫁入り」「さんかく」の2作品が選ばれました。「オカンの嫁入り」は、ささやかな日常を描きながらも、ヒロインの気持ちの流れに乗って、最後まで心地よく観ることが出来ました。絶妙なキャスティングもあるかと思いますが、キャラクターを生き生きと描かれており、確かな演出力を感じました。「さんかく」は、人物設定、ディテール等にオリジナリティがあり、これぞ人間というキャラクターが描きだされ、関係性によってドラマは生まれるということを改めて感じさせてくれました。

お二人とも人間を描きだす確かな目線を持たれており、これからも今回同様自らの脚本でオリジナリティ溢れる作品を撮り続けて欲しいと思います。また、スクリーン、照明という映画の現場から監督になられていることも嬉しく思いました。2作品以外にも気になった作品がいくつかあり、厳しい時代ですが、才能ある監督たちと映画を作り続けていかねばと思いました。

### 榎井省志（アルタミラピクチャーズ）

金賞に輝いた呉美保監督の「オカンの嫁入り」は、一つ屋根の下で暮らす母娘とその二人を取り囲む人物たちのキャラクターが配役ともあいまって、心の機微をうまく描いているホームドラマだと思いました。母娘の間の確執を描きながらも、監督が登場人物たちに向ける眼差しは暖かく、観ていてほっこりとした気持ちになれました。そして、男が一人と女が二人いれば面白い映画が作れるということを実証してくれたのが銀賞の吉田恵輔監督の「さんかく」です。タイトルが示す通り三角関係の話ですが、最後に高岡蒼甫は姉妹のどちらに何て声を掛けるのかが妙に気になります。気の利いた締め括り方でした。ただ、ラストに持っていくまでの展開が多少冗長気味なのが気になりました。受賞者二人はもともとスクリーンと照明マンという映画の撮影現場でスタッフとして活躍していた人たちです。現場で培った経験を活かし、監督としての実力が評価されたことは非常に喜ばしく思います。また、残念ながら今回の選にはもれましたが「SR2 サイタマノラッパー2 女子ラッパー☆傷だらけのライム」の入江悠監督も今後が気になる逸材であったことを最後に記しておきます。

## SARVH プロデューサー賞選考委員講評

### 岡田 裕（アルゴ・ピクチャーズ）日本映画製作者協会 副理事長

本年度は、SARVH 賞が始まって以来の初めての二人（2作品）受賞となった。テレビ局主導のメジャー映画と単館系映画との観客動員が広がって行く中で、一映画プロデューサーとしてどの様な企画を立て、どの様にして金を集めて製作し、どの様な配給・興行のルートに乗せて、結果として収支バランスの面でも成功させていくかは大変に難しい作業である。本年度もこれらの難関を乗り越えて、メジャー、独立系を問わず、数本のプロデューサー力のある作品が選ばれて審査会で議論されたが、結果、甲乙つけがたく、二人受賞となった。桂壮三郎氏の『アンダンテ～稲の旋律～』は、音楽を志していた女子大生が対人恐怖症におちいり、ひきこもりの生活を送っているが、ふとしたことから千葉の農村で稲作りの生活を送ることで次第に自我を取り戻し立ち直っていく話で、日本の農業の再生というテーマも絡めて今日的な作品となっている。桂氏自身の手で自主上映され、千葉県を始めとして現在全国300ヶ所上映され来年には資金を回収する予定である。若松孝二氏の『キャタピラー』は、戦争で両手両足を切断され、軍神となって田舎の村に帰ってきた男と、その姿に恐怖しながら受け入れる妻の話で、性と生の狭間から戦争を見つめ直すという形で、若松流の多少強引な設定ながらメッセージ性に富んだ作品である。この作品は製作・監督の若松氏自らが配給し、現在3億円の興行収入を上げている。受賞した2本共に、自分で作りたい映画を何とか自力で作る上

げ、自力で売って歩くという独立プロデューサーの原点に根ざしている点で共通している。選考の中で『告白』という映画のプロデューサーの川村元気氏にもかなりの票が集まったことを付記しておく。東宝というメジャー会社の中で、今迄の娯楽映画の流れを変える企画に挑戦し、作品的にも興行的にも成功させた同氏は高く評価された。